




爆乳パイトリダーが
クズニートの恨みを
買って種付けプレス!!

A dark, atmospheric street scene at night. The image is dimly lit, showing a street with a street sign on the left and a red mailbox on the right. The overall mood is mysterious and somber.

復讐催眠

何かしらの傷害を負うと、それをトリガーとして、
傷害を負わせた者に催眠をかけることができる特殊能力。

「エロの神様ありがとう！」

復讐催眠の能力に目覚めたその瞬間から、僕はエロしか頭になかった。


ほぼニートとして生活を送ったこの十数年。良いことなど殆どなかった。

しかし、30歳を目前にして春が来たのである。

若いツヤツヤの肉をモミモミずぶずぶできる。想像するだけで涙が出た。

ターゲットは決まっていた。安定して傷害を与えてくれそうな気の強い娘。

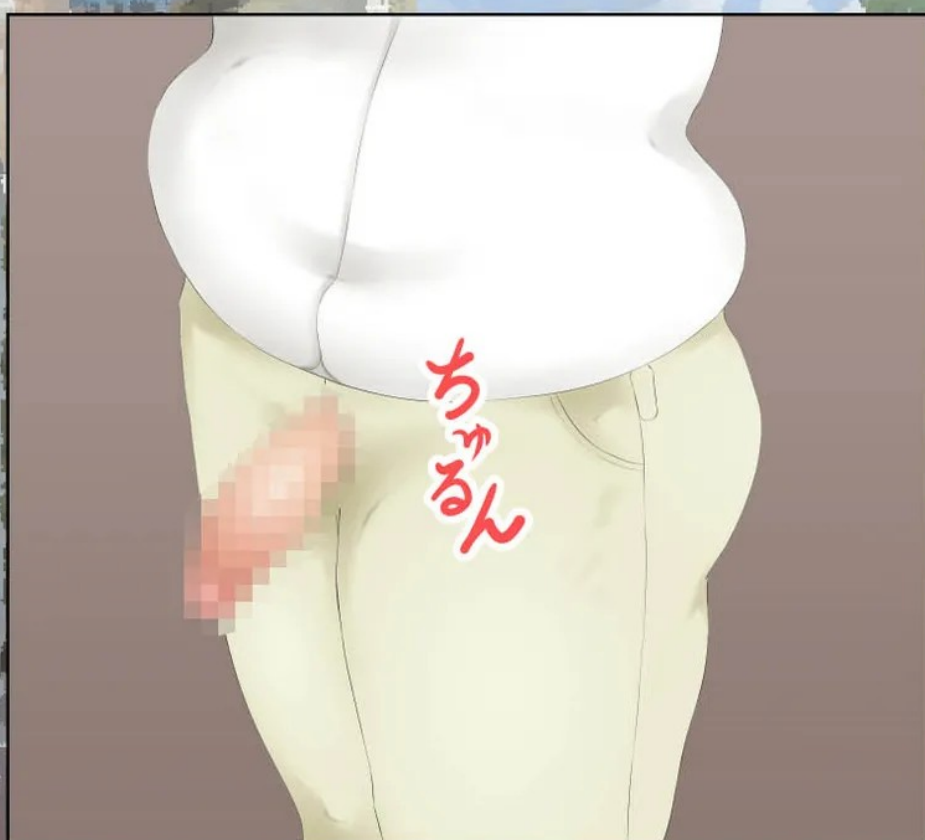
3か月前、1週間でバックれたバイト先にいた年下の先輩、篠原水希さん。



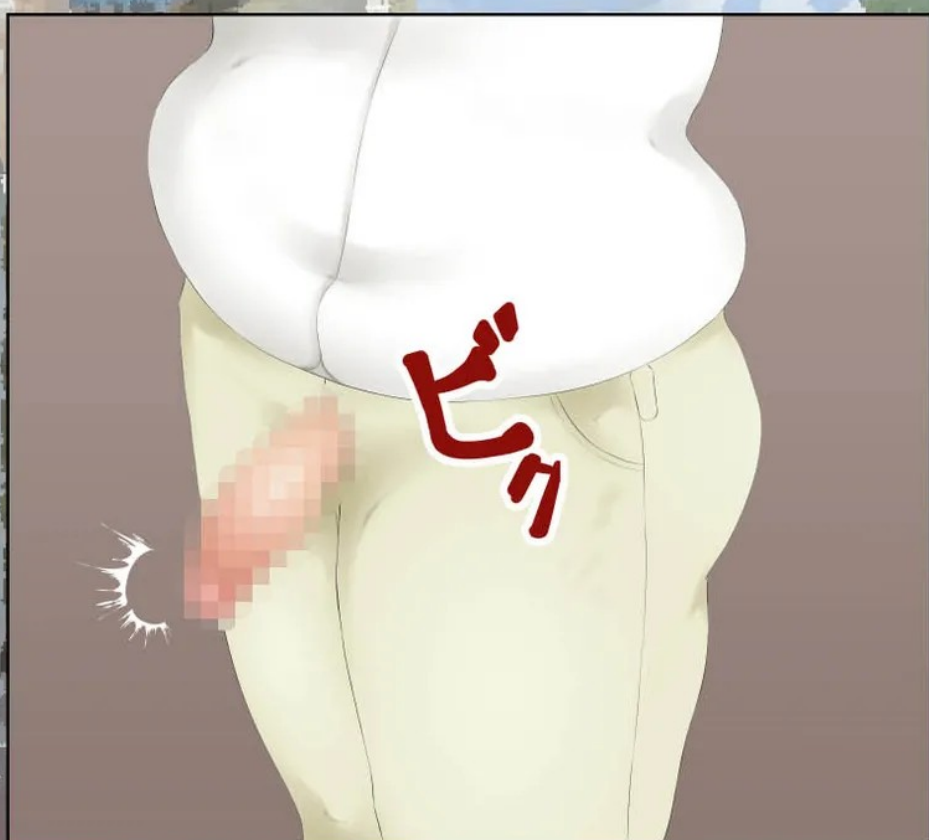
彼女を怒らせる作戦を練りに練ること3日。
僕はどある住宅地にいた。

「ここらへんは水希さんの帰宅ルートだったはず、
そろそろ時間だ」

僕はそつとズボンのチャックを降ろし、
おちんぼを取り出す。



「おい！お前！」



この懐かしい声は

「ニニ」で何をしてる!」



ドン

まぎれもない、爆乳爆体の水希さんだ。

相変わらず凜々しい顔で恵まれた体をプルンと揺らしている。

ファッションは地味だが、隠れファンは多い。

「お久しぶりです。いやあ膀胱がパンパンだったので。シヨバシヨバ小便を垂れていたんです。不可抗力ですよね」
「公共の場での排泄行為は立派な犯罪だ。今すぐその汚いモノをしまえ。あと誰だお前は」



「え、僕のこと覚えてないんですか？悲しいなあ、シヨツク」
「早くしまえ。グズグズしてると殴るぞ」

(きたきた笑)



「おおお痛ええ。歯折れたよおお。」

ああ
ああ
ああ
ああ
ああ
ああ

ヘッピン!

「ゴキブリめええ」

「馬鹿な奴め。以後気をつけるように。さて帰るか……ん？」

「ラフ動けませんか？」
「いやあ血を流したかいがありました」

「…何をした」



常にクールだった水希さんがわずかに焦りの顔を見せている。それだけで金玉がザワザワする。

「親しくなるために身体拘束の催眠をかけました。
恋人への第三步ですかね」

「ふざけるな」

「それより本当に僕のこと覚えてないんですか？
3か月前一緒に働いてたじゃないですか」



「3か月前!? ああ、確か二週間でバツクれたクスがいたな。
仕事覚えが悪くて、会話もろくにできないカメムシ以下の
人間が」

「あれはお前だったのか。顔などすっかり忘れていたぞ」

「……なんだと」

「バックレ行為は悪質だが、あの時ばかりは感謝したぞ。お前のような異臭をはなった人間に居座られては他の従業員に悪影響なのでな」

「うるさい！僕が仕事覚えが悪かったのはアンタにも責任があるだろ。指導係のアンタがやるべきことをきちんと説明しないから、僕はミスした、それだけのことだ」

「会話だって僕は積極的に話を振っただろ。使ってるシャンプーの話とか。シカトしたのは誰だ。すべてアンタの新人イビリが招いた結果じゃないか」

へら

へら



「お前のあとに入った新人はみんな楽しそうに働いているぞ。仕事の覚えも良い。全く同じ指導をしたつもりだが、こんなに結果は違う。」

「自分の無能さを人のせいにするな。新人イビリなどあの職場には存在しない。お前が都合よく作り上げた妄想だ」

「グツ生意気なメスだ。調子に乗りやがって。催眠濃度を上げて内面に踏み込んでやったぞ」

「????????」

「まだ状況が理解できてないのか。おい水希、お前の家って近いんだろ?案内してくれ、一休みしようや」

「……当たり前だろ。」

「お前を家に招くために私は声をかけたんだ。くつろいでいけ」

ふわ

ふわ

ほほほ。催眠最高。口調は生意気なままだが従順な肉メスに早変わり。さつきはカツとなつてごめんよ。なでなで。よし遊び尽くすぞー!

「ところで水希ちゃん、いつまでそんな地味地味な服を着てるんだ?僕と会うときはもつとキワキワでピチピチな服を着ろつていつも言ってるじゃないか」

「嘘をつくな。初めて聞いたぞ。…でも、お前が望むならそういう服を着てやつてもいい」

「あっそ。じゃあこれに着替えてー!ほらボサツとしない早く」

「うっう。なぜか怒りと恥ずかしさが湧いてくるぞ。これは服と言っているのか」

「うっひよー。服脱がせたらエグいな。ゆらゆら肉メロンだ。ふわっふわで柔らかそう」

ああ...

ぽん

ぽん

「さすが水希ちゃん、よく似合ってるよ。モデルさんかな。さて、次は踊ってよ。踊りながら家まで案内して。ハレンチ踊りが見たいんだ」

「ハレンチ踊り？そんなものは知らない。早く帰ろう」



「難しいものじゃないさ。阿波踊りの雰囲気でき、おっぱいをゆさゆさ弾ませればいい。そして歌いながらゆっくり進む」

「何を歌うんだ？」

最悪...

「あそーれ、男も女もハレンチハレンチ。肉を求めてハレンチハレンチ。子宮がうずうずハレンチハレンチ」

「なんて低俗な歌だ。歌うだけで心が穢れる」

「いいからいいから。命令だぞー」



「男も女もハレンチハレンチハレンチ。肉を求めてハレンチハレンチ。子宮がうずうずハレンチハレンチハレンチ」

「やればできるじゃん、その調子！」

「おチンポむくむくハレンチハレンチ。しゃぶってごっくんハレンチハレンチ」

「アドリブいいねえ。素質あるよ」

「口が勝手に動く〜」



たん

たん

たん

「あとは表情だ。そんな鬼みたいな顔じゃダメダメ。トロけ顔でエンジンジョイ踊りしなさい」

「乳ももつと揺らせるだろ」



（うぬぬ、クズ野郎、）

「ほら、笑顔笑顔」

「ハハハ 能面みたいな顔しちゃって でも可愛いよー」

「あひいいい 皆見てる、通報されちゃうう」

「ネガティブ禁止だよ。もっと自分を解放して、踊りに集中するんだ」

はにょん

ばむ!

ばむ!

ばむ!

「きつきつマンコに肉棒ズンズン。子種ミルクをチュウチュウ、チュウチュウ」

「ハレンチハレンチ」「ハレンチハレンチ」



「我慢できない!」
「おチンポすりすり、パイオツギゆうぎゆうだ!」

「ふぬ——!」

!?

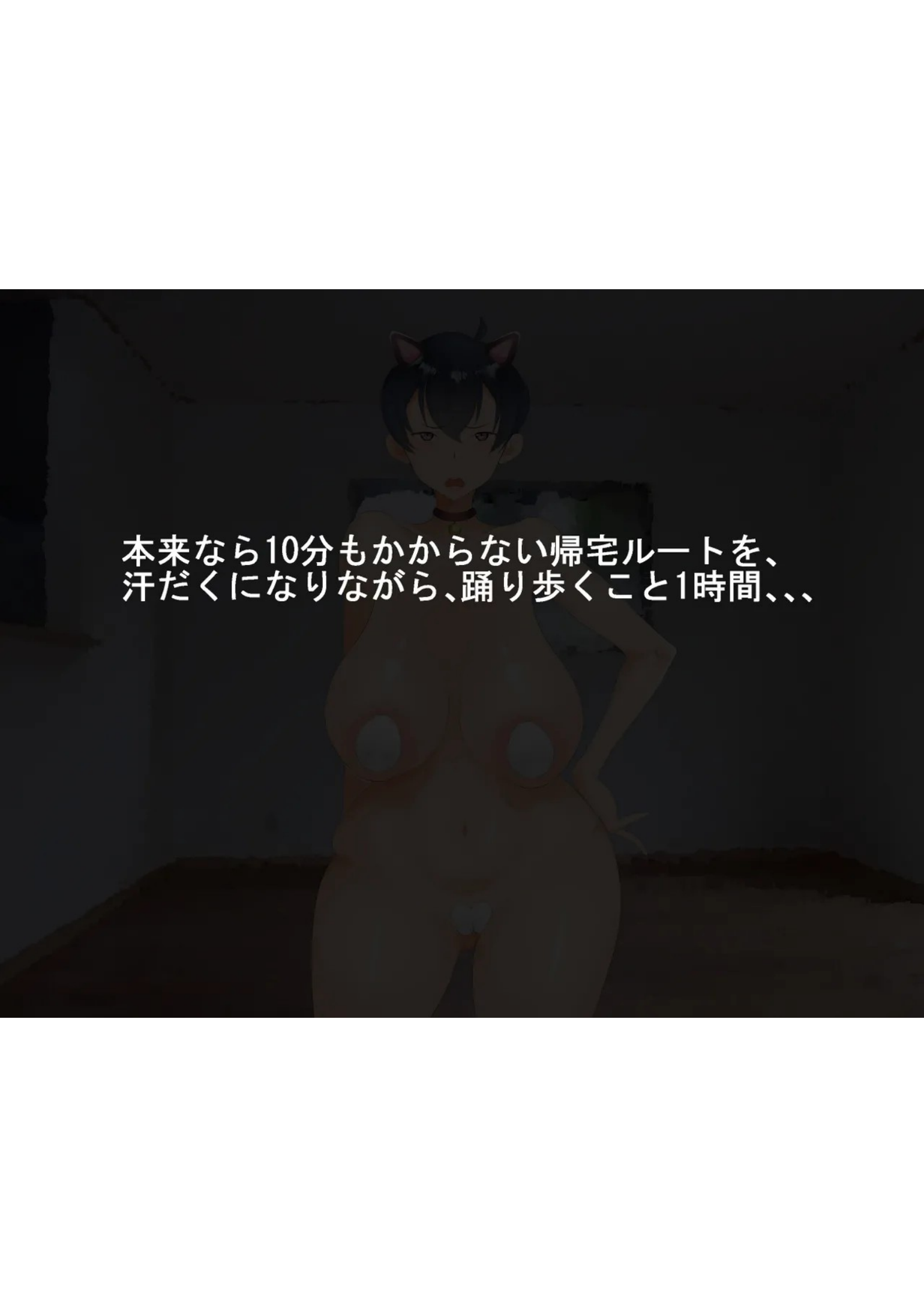
ポ

ズッ

「つきたてお餅をこねこねこねこね」
「エロ正月だよこねこねこねこねこね」

「ううう、終わらない」





本来なら10分もかからない帰宅ルートを、
汗だくになりながら、踊り歩くこと1時間、、

「やっと着いたん」

「へー。ここが水希の部屋か。予想通り殺風景だなあ」



「あまりジロジロ見るな。それよりこの猫耳は何だ？」

「萌え要素が欲しくてつけたけど、こんなに似合わないとは」
「まあ二応つけておいて」

「失礼な奴だ」

「ヤバそうなもの全然置いてないなあ、つまらない」
「しいて言うならこの写真立ての子が気になるなあ」
「えちえちじゃん」

「あまり部屋のをイジるな。…それは妹だ」



妹

大好き

「へえー。姉とは真逆のふんわり清楚ちゃんだなあ」
「チャラい男につかまりそう」

「お前に何が分かる。確かにお人好しなところがあつて、クズ男たちが寄つては来やすいが、私が断じて許さん」

「もう付き合つてると思うよ。たぶん」

「先週、紹介したい人がいると、男を連れてきたが、無礼な男だったから、顔を二発張つてやった。もう寄りつかないだろう」

「親のお金で遊びほうける偏差値30のクズ学生など、どこから湧いて妹と接点を持つのやら」

「部屋に紛れ込んだカナブン並みに不快だ」

(虫の喩えが多い女だな)

呆れ：



「まあクズ男は世の中たくさんいるからね。外見ばかり見ずに内面を見ないと」

「僕のような男と付き合いたいなら内面をじっくり見ればいい」

「私は人間の話をしてるんだ。タガメと肩を並べるお前などは論外。誰も付き合いたくはないだろ」

「おい！ちよつと気を抜くと無礼なこと言いやがって！罰だ！」
「僕のちんかすたつぷりおちんちん、クリーニングしなさい！」

「うう、何だこの匂いは。釣りエサをより濃密にしたような匂い。空気がよどむ」

「まあ3日ほど風呂に入っていないからな。でも、好きな男の匂いなら歓迎だろ？」
「催眠効果も相まって、立派なオスの匂いに思えてくるさ」

ぞわ…

「お前を好きになった覚えなどな、ゴホツ！ゴホオオ！」

「大げさにむせやがって。本当は妹にも嗅がせたいって思ってるんだろ？」

「ふざけるな。こんな異臭を嗅ぐのは私一人で十分だ」

「独占欲かな？まあ頑張ってオチンポ掃除したまえ」



「れろろろろ」

「おひよ！おひよ！おひよ！おひよっ！」

きめ細やかなトロ舌がチンカスをかき分けて、肉竿を敏感にしてきやがる。ジツトリと見つめる目つきもたまらない。

「水希い。言動とは裏腹にノリノリじゃないか。チンポがよだれでテロテロだぞ」

「んんん、全部、催眠のせいだ」

「ふーん。じゃあ金玉マッサージも追加でやってー」



「うえ、イヤな感触、コリコリの玉が動いている。弾力のある幼虫みたい」



美女の滑らかな指先が、ひんやりと睾丸を押し込む。金玉は袋の部屋を縦横無尽に動き回る。「うふう 手つき良いよお。粘度高め精子、チャージされてくううう！」



「ズズズズ」

「むふ！おうぐ！」

張りつめた亀頭を、好奇心の赴くまま、温かい口内で包み込む水希ちゃん。

快感で蕩ける男を見て、やりがいを感じ始めているように見える。



「上手いぞお水希。カウパー汁、一滴残らず飲み干しなさいい」

「ブブブブブツ」
(まずくて吐きだいはずなのにい)

「出ましたあ〜」

ちゅーん

ちゅ…ん

ちゅ…ん

ちゅ

ちゅ

ちゅ

ちゅ

ちゅ

ちゅ

ちゅ…ん

ちゅ…ん

「うぎいやあああ」

ちゅーん



「待たせてごめんね。ご褒美の挿入タイムだよ」

（あれだけ黄色いザーメン出たのに、もう勃ってる、ゴキブリ10匹分のしっこさだ、）

「そう簡単に僕のペニスは衰えないよ。クールな水希がイキ散らかす様を見るまではね」

「イキなどしない」



!!

あっ

あっ

あっ

むち

「どうか。亀頭を軽く擦りつけただけなのに、もう水希の肉マンコはヒクヒク悦びの声をあげているぞ」

「気のせいだ」

「いひいひいひいひい」

「おっほお！さっそく愛液溢れてんじゃん」
「ローションいらさずのドスケベちゃん」
「恋愛対象じゃない男にこれだけ濡れないよね？」
「本当は付き合いたいでしょ？」



ドッパッ!!



「付き合っつて、同棲して、毎日僕の子種を受けとめたいんでしょ？」
「それだけは絶対イヤあ」



「おっふ！出る出る出る！精子のかたまり出るうう！」

「ああああんああんあああああ」

「ふん！おっ？おっお！」

「おっほ、うんうん、わかるう」

「~~~~~♡♡♡♡♡」



ドッッッ!!

「水希の赤ちゃん部屋、僕の遺伝子汁で満たしてあげるうう」
「豊富な膣肉がこれでもかと肉棒を絞り込み、強欲な子宮口が一滴残らず子種を吸い込もうとしてくる。」



「はぁぁん その体勢だめえええ」

睾丸フル稼働で湧き出る子種をより美肉の奥へ送り込めるよう、力強く身体を押し付ける。

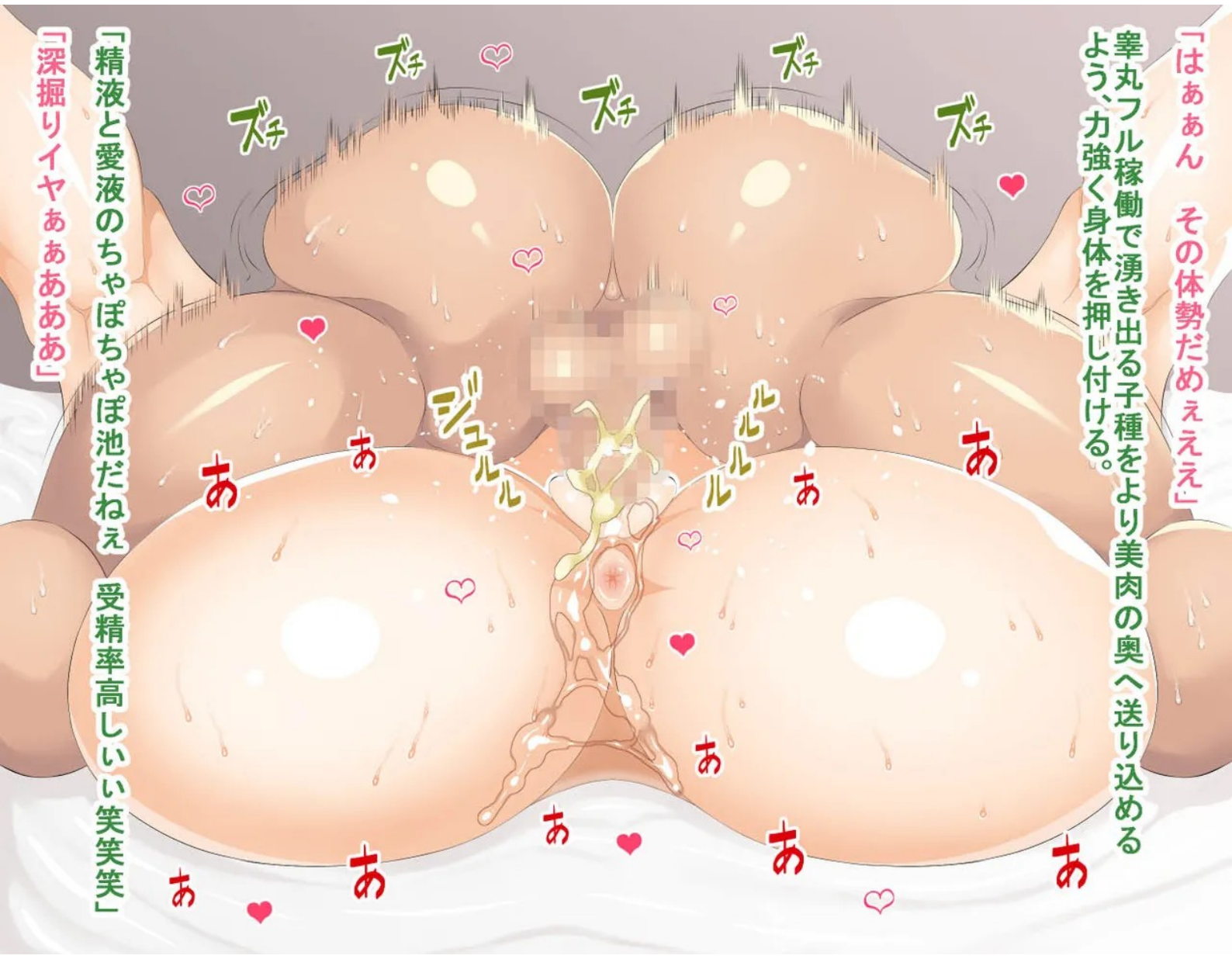
ズチ ズチ ズチ ズチ

ジュルル

あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ

「精液と愛液のちやばちやば池だねえ 受精率高いい笑笑笑」

「深掘りイヤぁぁぁあぁあ」



「プレス！プレス！」「ふぬん！ふぬふぬ！」

「ひやあああ 密着しちやだめええ」

「とろけ密着最高お。このまま一つになって蝶のように羽ばたくう」
「きらいいい 蝶なんて蛾と同じだよおお」
「それはどうでもいい」



あーあーあー!!
はあーあーあー!!
んんんあー!!
んんんあー!!

ぬん ぬん スリ スリ スリ スリ

「スピード上げちゃうよおお！」

「ほおおあん！んん！んんん！」

(無責任中出し、最低なのに気持ちいい)
(弱点を逃さずみちみち突いてくる。意識が飛ぶ。)

ポビポビ

ポビ

ポビ

ポビ

ポビ

「力任せでも相性抜群だからOK笑
恋人ってそういうことおお！」

あっ♡あかん♡あかん♡死ぬ!!
あっ♡あかん♡あかん♡死ぬ!!

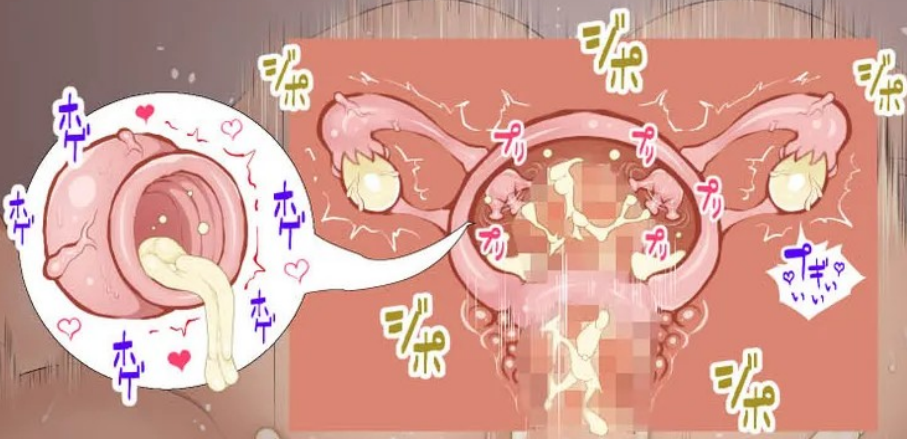
「もつと深くううう！」

「えっ！えっ！？」

「おちんぼ、外子宮口を突破するノ巻WWW」

「なんでええ なんでえええ」


「ふふふ 催眠効果ああ 卵管子宮口がせり出して
こんにはああ」



「子種ミルクガブ飲みしちやだめええ」

「卵子逃げてえええ！」

あっ♡あかん♡あかん♡死ぬ!!
あっ♡あかん♡あかん♡死ぬ!!



「おや？意外な訪問者が来てくれたようだね」
「みんなー こっちおいで～～」

ゴキブリ
ゴキブリ
ゴキブリ

「ひゃあああ 虫っ！ なんでええ こつち来るなあああ！」

「ははは これも催眠効果かな
色んな虫たちが
おびき寄せられたねえ」

びく!!

「ゴキブリ多めイヤああ これじゃ SEX集中できないいい」
「おや？水希はそんなにSEXを求めていたのかい??」

「えええええ」



「虫の怖さなんて快楽で忘れさせてやる」

「ふ」お 衰え知らずオチンポ来たああ」

「ほーら 虫がいようと
愛液いっぱい子宮はアツアツ」



「僕と一緒なら虫も怖くない」

「うーうーうー(虫…可愛いかも)」

「僕の愛情の強さでもある」「そろそろの……らなら……」



「あつ……あつ……卵子……追い込まれてる……」
「精子……強い……頭ツンツンぶつけてくる……」

一時間後

ズボ
ズボ

「もつとお もつとお」

「ハハ あんなに強気だった水希も今じゃ
蕩けモードだなあ」

「だってえ 中がビクビクしてえ喜んでるからあ」

「あっ そっちの穴はだめえええ」

「ほああ うんち穴 みしみし言ってるうう」

ピリリリリリン

「ん？」

ピリリリリリン

「おい水希 ケータイ鳴ってるぞ 誰だこんな時に」

「ほ」お いい 妹のお まりちゃんん」

「おお あの清楚ドスケベちゃんか
こりや電話に出ないと」

「はあ〜いい」

「んんん まりちゃん」
「お姉ちゃん、この前はごめんなさい、」
「んんんん？」



ぐすん……

「紹介した小林君、本当はもっといい人なの。
あの日はちよつと緊張してて」

（↑週間前に揉めたとか言ってたな）

「悪気はなかったの。お姉ちゃんとこのまま
気まずい関係でいるの辛いです」

「んんん いいよおお」

「えっ」

「小林でも林でもいいよおお 気持ち良ければOKえええ」

「お姉ちゃん……ありがとうー」

「そんなことよりいいい」

「お姉ちゃん催眠にかけられてええ
身体がピンピンになっちゃってええ」

「……お姉ちゃん？」

「乳首の色とかもお変色して
ウズウズするしい」



「子宮も下がってきて
外にはみ出てるしいい」

「……」

「今はあ アナルを攻められてえ 新しい世界が見えてええ」

「まりちゃんにもオススメだよおお」

小林「お姉さん、それマジっすか」 (小林いたのか。)

「おおおお 母乳噴射ああ 出る出るううう」

「何でもいい小林もまりちゃんも好き放題やればいいいい」

「見直したっす ビッチ姉さんww」



しやばばばば

しやばばばば

しやばばばば

しやばばばば

「まりい 俺の子種ぶちぶち中に入れてやっからああ」

「小林くん小林くん」 「下の名前で呼べいいい」

「まりい 一緒にイコウウウ」

「俺も会話に参加させるおおおお」



濃厚チャラチンポ好きいいい

おんちぽんちぽんち

熱々の子種マグマ欲しいいい

私もおおんちトンネルにいい
子種マグマ流しこんでええ

しゃんしゃん

しゃんしゃん

直腸までええイチモツ打ち込んでええ

肉便器として成長したいいい

ビッチ姉妹として世に送り出してえええ

ブキ

ブキ

ブキ

ブキ

ブキ

ブキ

ブキ

ブキ

「姉妹でイけるなんて幸せです」

「強いオスの精液」ちそうさまでした」

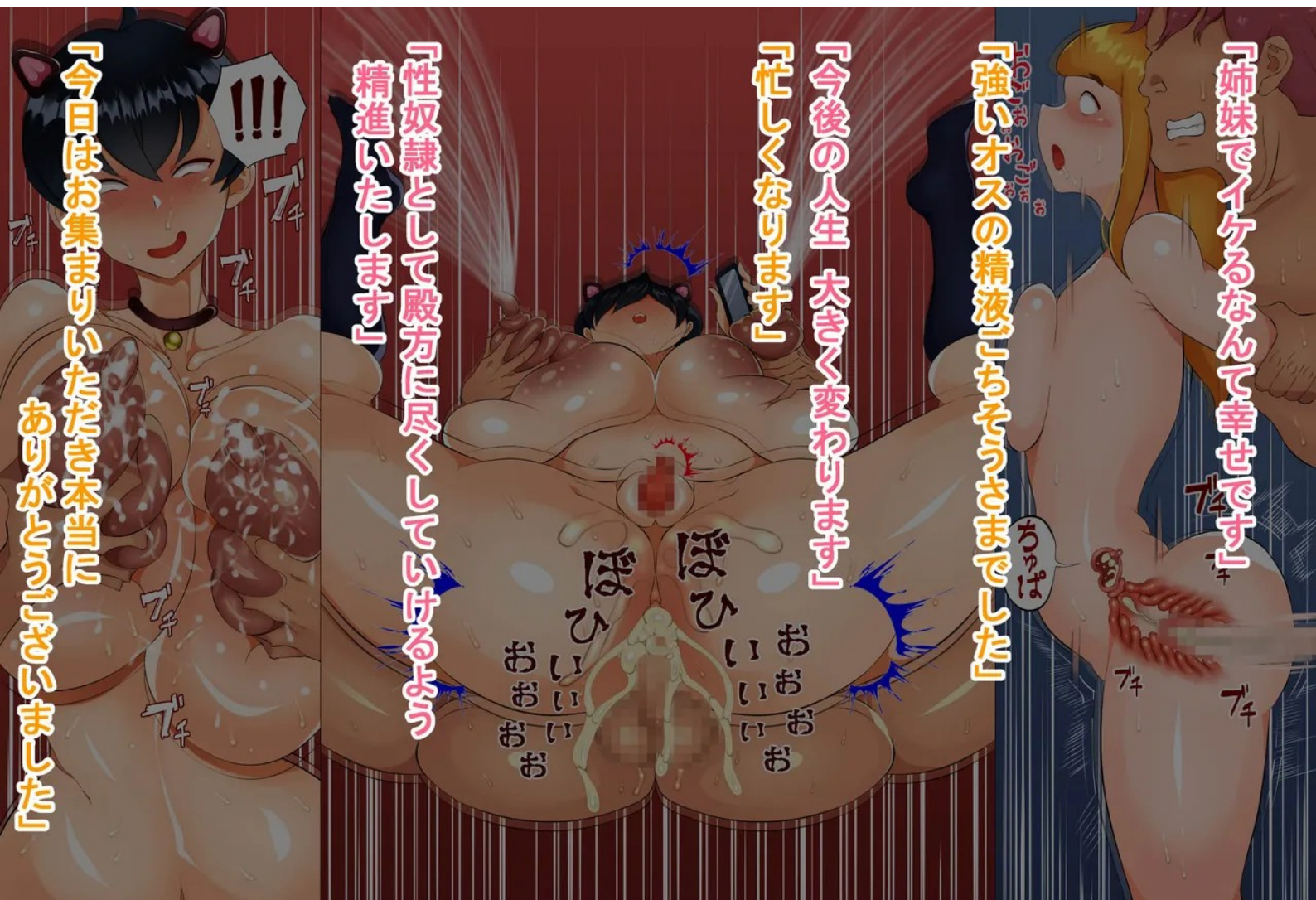
「今後の人生 大きく変わります」

「忙しくなります」

「性奴隷として殿方に尽くしていけるよう
精進いたします」

「今日はお集まりいただき本当に
ありがとうございます」

「さいました」



数日後、某街にて

「ねえママ なんであの人裸なの？」 「見ちやダメ」

「うわ ムービー撮ろ イ〇スタ映えWWW」

「最低 生きてて恥ずかしくないのかしら...」

「取材させてください あと触らせてください」

「海外では普通ですよ たぶん」

「ダメ」

「ダメ」

「ほーら皆見てる 惚れ惚れしてる 皆水希のことが好きなんだよ」

「ほ、ほんとお？」

「職場の人たちにも今の水希、見せてあげよ」

「今までの自分は仮面を被ってました、これが本当の私ですってさ」



「ちよつと怖いよお」

「大丈夫、クビになったとしても僕は味方だよお」

「一緒にライブチャットで稼ごうww」

「うんんんん」

「おっほおお 嬉しさ余って滝ミルク来たああああ」

「これ1時間は止まらないヤツですよ皆さんwww」

「さすが僕の恋人おおお」

しやばああー

しやばああー



「あつイジめてる訳じゃないですよお 愛情表現ですうう」

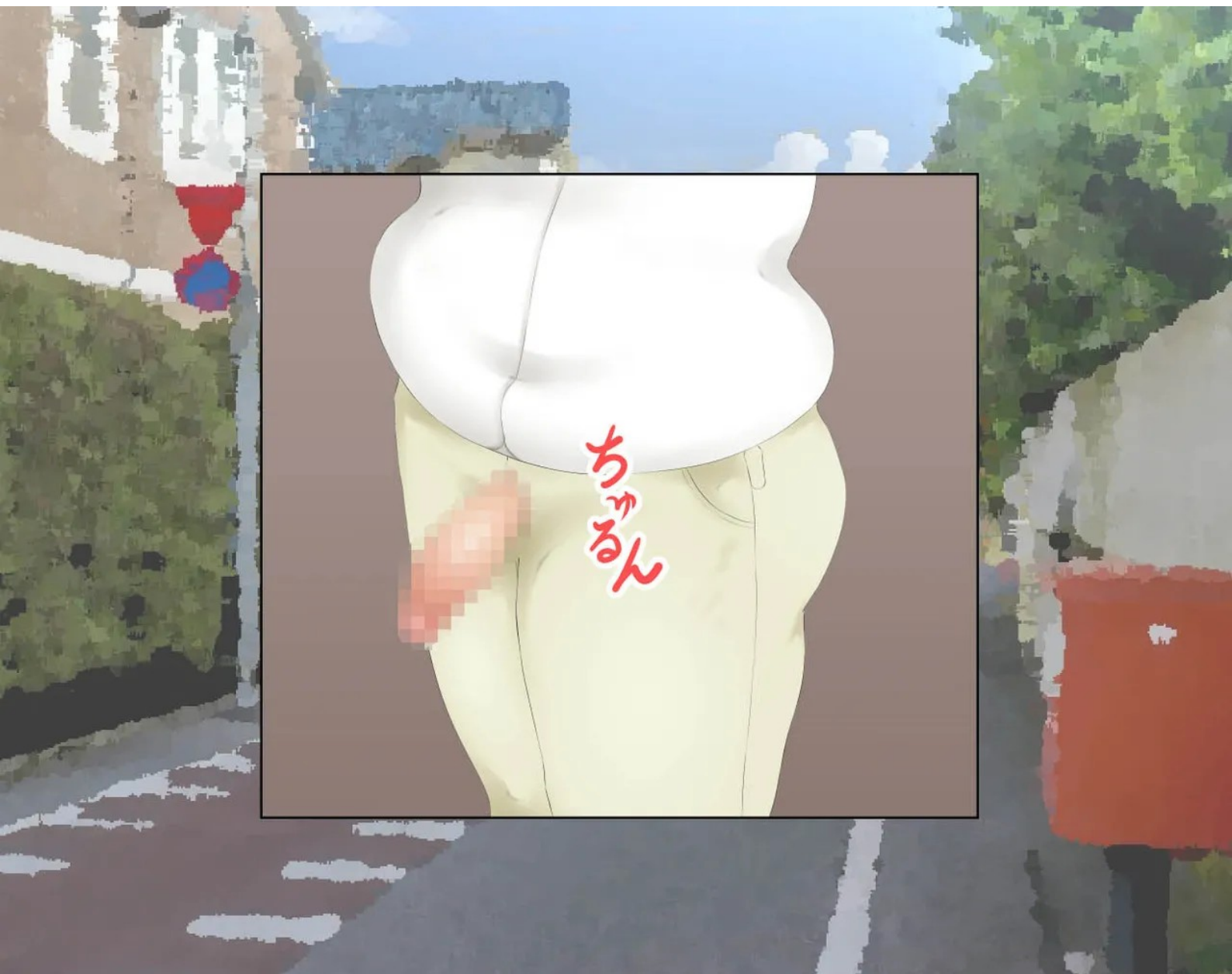
「催眠じゃないですよお この子自分の意志なんでwww」

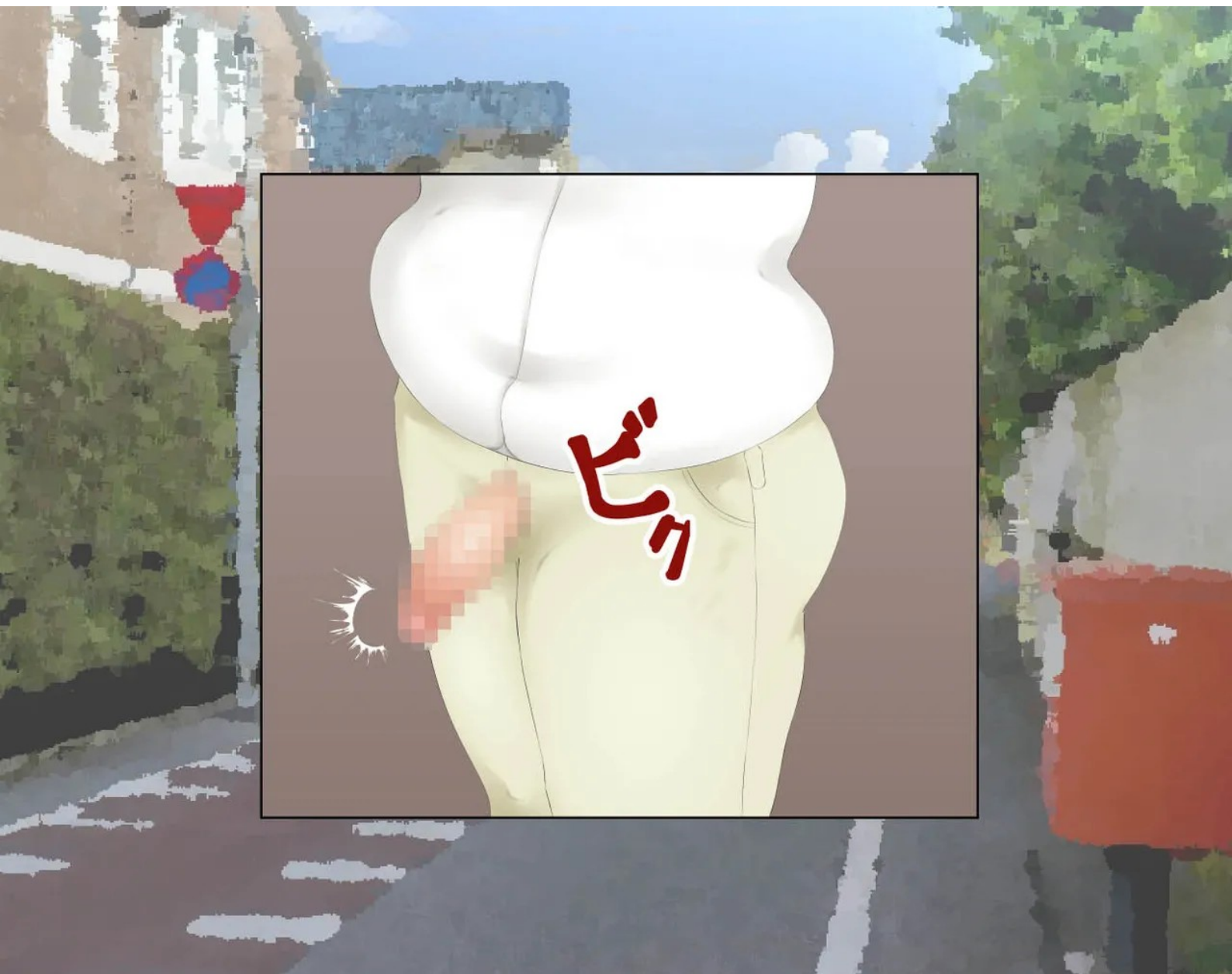


種子
グズの勝利で完。。。。

しやばああー

しやばああー

























最悪...



たん

たん

たん



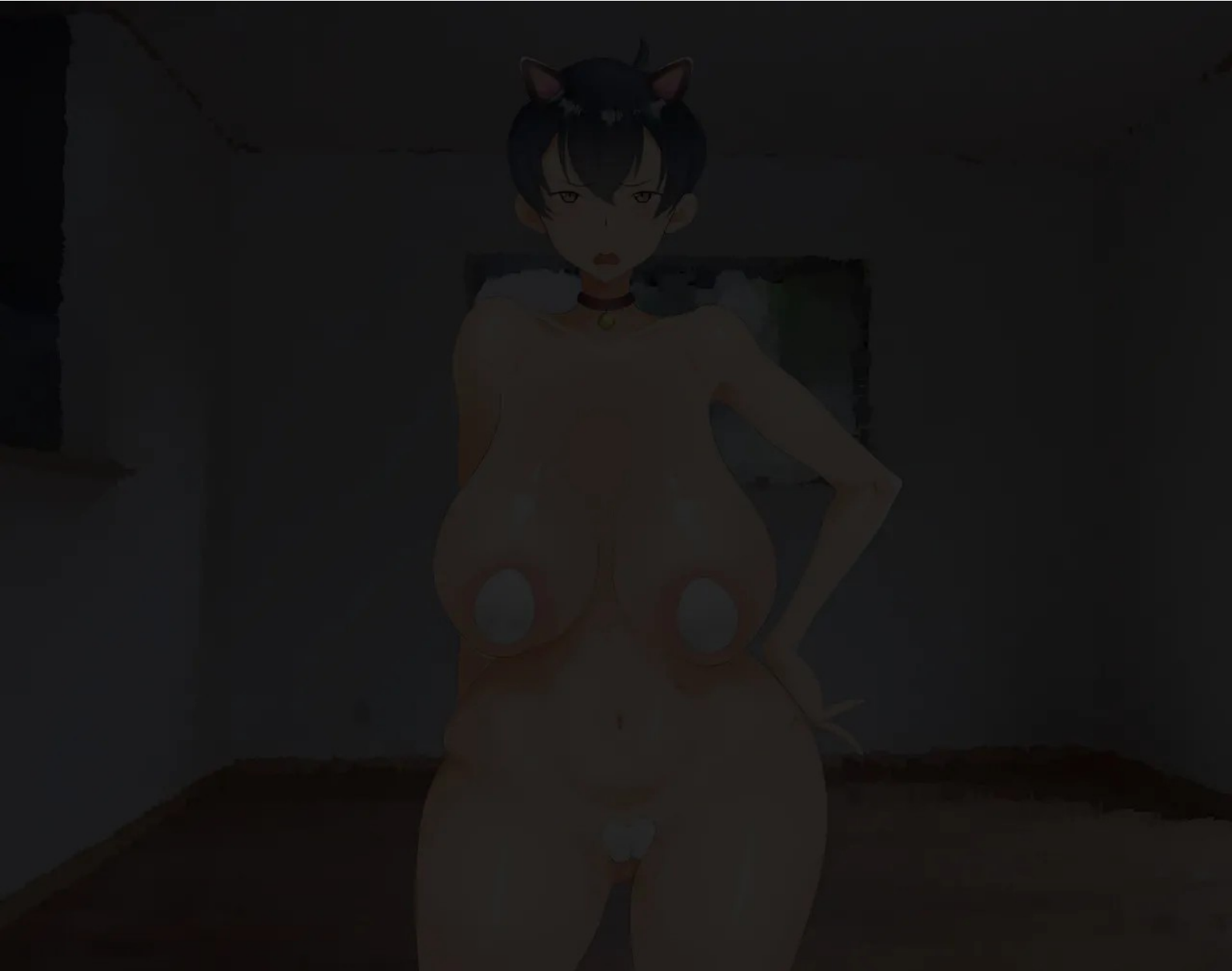
はにょさん

ばむ!

ばむ!

ばむ!











呆れ！



ぞわ...









ぐわ
ぐわ
ぐわ
ぐわ
ぐわ

ぐわ
ぐわ
ぐわ
ぐわ
ぐわ

おお
おお
おお
おお
おお



てはーん？

ては...ん？

ては...ん？

ては

ては

ては

ては

ては

ては

ては

ては

ては...ん...

ては...ん？

ては...ん？







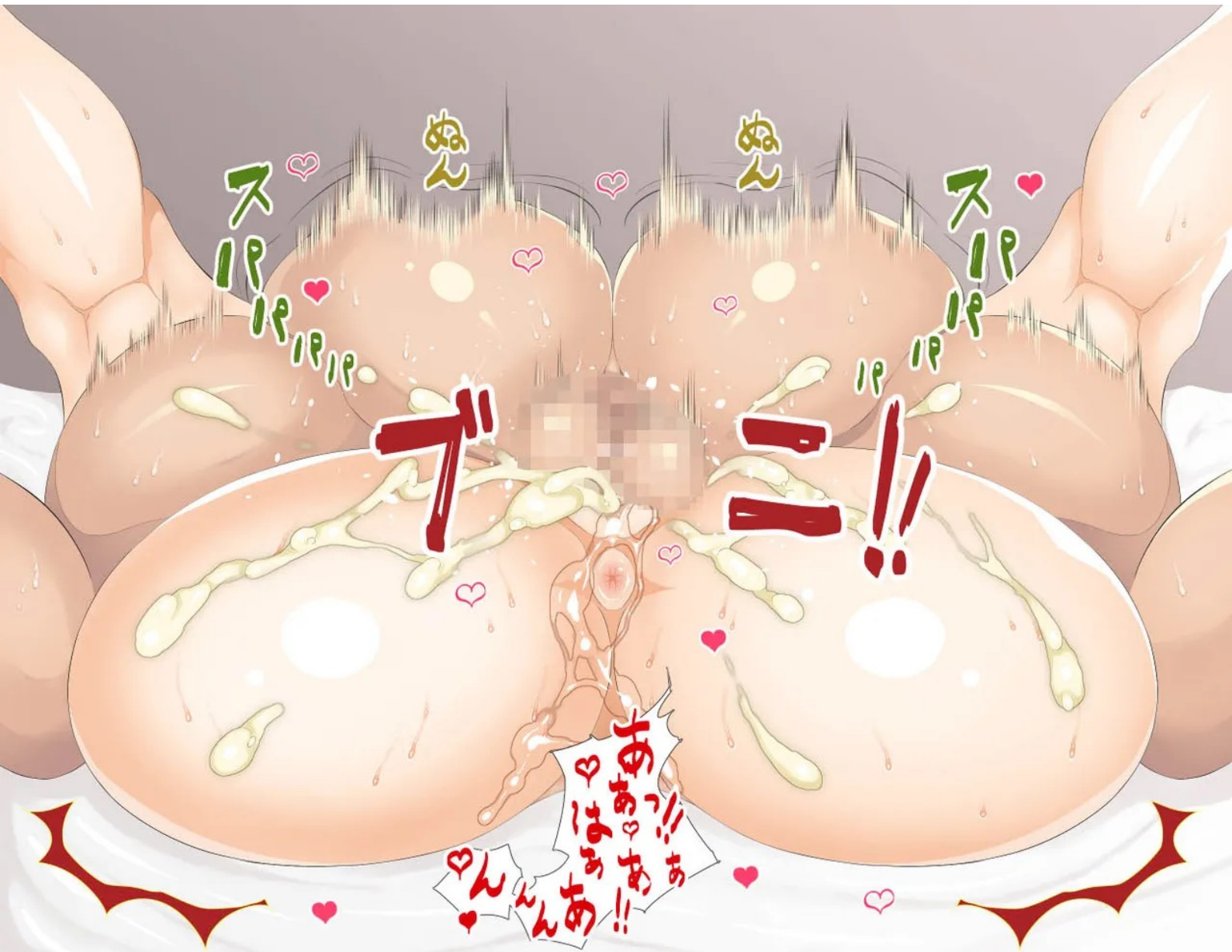
ドッ!!

スチ スチ スチ スチ スチ スチ スチ スチ スチ スチ

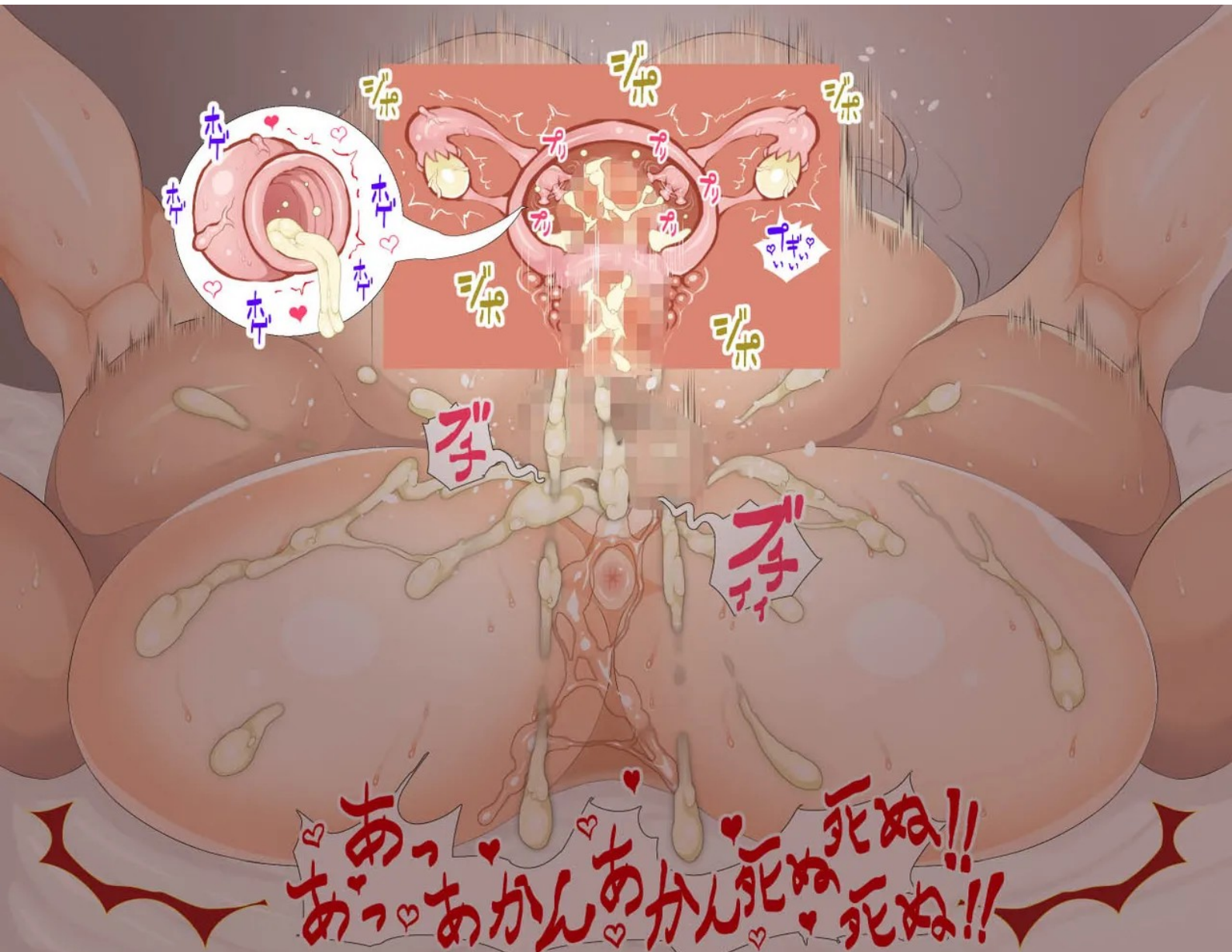
っ♡

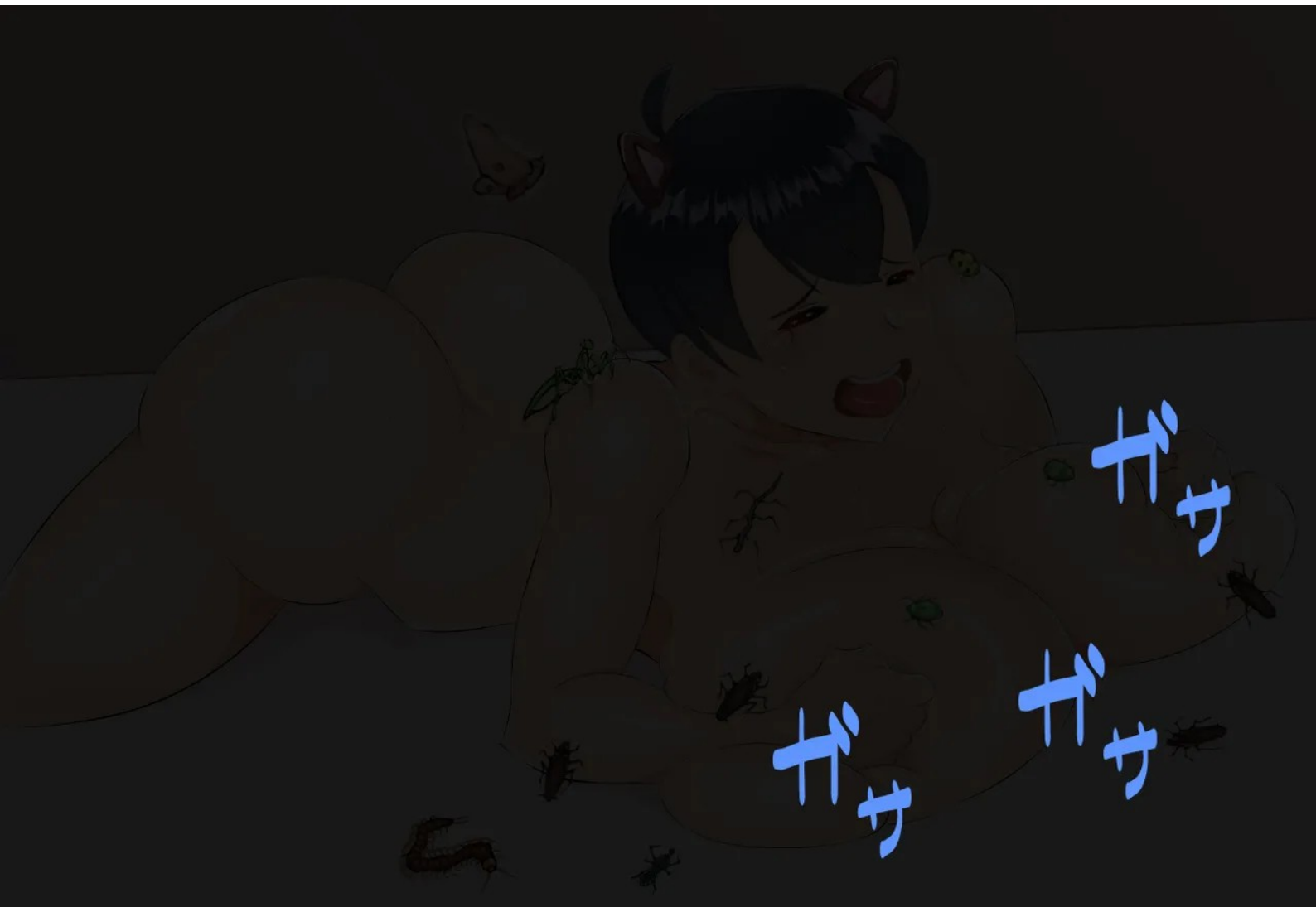
ふん ふん ふん ふん

ズチ ズチ ズチ ズチ ズチ









ぴく!!









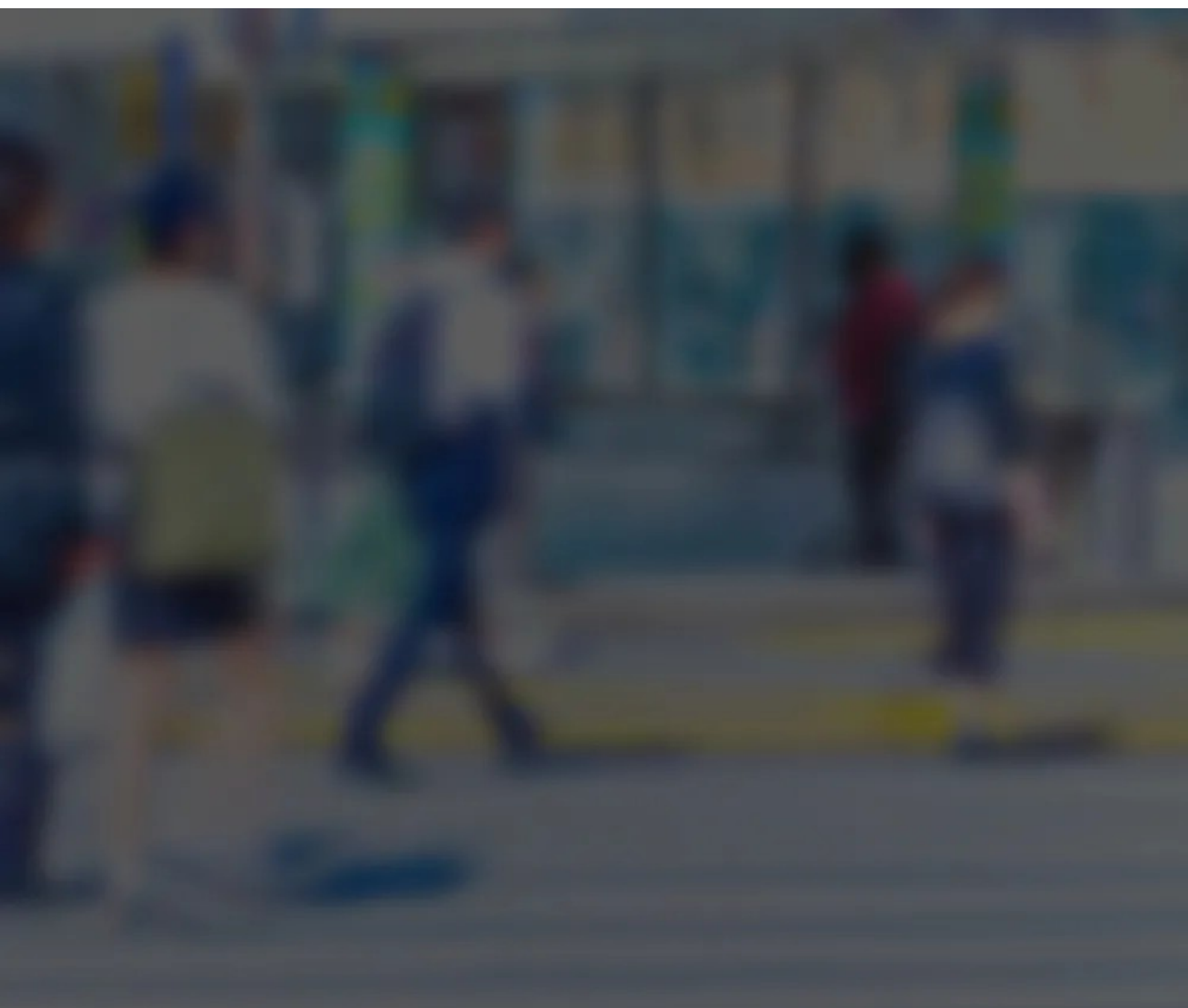
不
亦
亦











大
心

大
心



種子

ぼー

むち

むち



子種

しやばああー

しやばああー



種子

しやばああ

しやばああ